ても、大友氏最大の危機であった。この最大の危機は、政親の異母弟親治の登場によって、「御所の乱」で宗心を除く大半の奸賊が平定されて救われたのである。『豊後国志』によると、明応三年（一四九四）に政親は羽衣山上に禅寺を建て、延東震禅師を開祖とした。その寺名を海蔵と名づけた。政親は自分が死んだら父親繁の近くに葬むるようにとの遺命をしていたので、群臣は相議してここに葬ったものである。

表紙について

切支丹柄鏡（きりしたんえかがみ）

（県指定重要文化財）

宇目町大字南田原字中岳
佐保盛重氏所有

この柄鏡は佐保家に代々伝わってきたもので、材質は青銅、形体は円体持送り無しの柄鏡である。

柄は長さ八・五センチ、持送りがなく素柄（すえ）である。

鏡体は直径一一センチの円体で、その縁（ふち）は直角式低縁、鏡背の地は細粒砂目である。

紋様が特異で、中心部の〇に十字は、日輪十字章であろう。十字章をはさむ上下の異様な紋様は、上が「エ」下が「イ」「ス」、つまりイエスと読めないこともない。縁に沿って描かれている植物はオリーブに最も似ているようである。オリーブもまたキリスト教とは深い関係を有しているものである。

「天下一上村大和守」という作者銘がある。

形式や鏡背地、作者銘の様式等から推定すると、江戸中期以降の作と思われる。

幕府は慶長十九年（一六一四）以来キリスト教の禁圧政策を強めていったが、寛文四年（一六六四）からは、各藩に宗門改めを強制的に実施させるようにした。更に同十年（一六七〇）宗門改めに際して人別帳の作成を指示した。各人はキリシタンでないという証明のために、どこかの寺に所属しなければならなくなった。

岡藩もその例外ではなかったが、キリシタン禁止にもかかわらず、隠れて信仰する者（隠れキリシタン）は後をたたなかった。

この柄鏡が江戸中期以後に作られたものであることからしても、この辺境の宇目郷にもキリスト教を信仰する者がおり、それを布教した者がいたに違いない。

（『ふるさとの文化財うめまち』より）